

まいいぶん 愛知

no.71

朝日遺跡にて巴形銅器出土！



愛知県西春日井郡清洲町の朝日遺跡から、弥生時代後期の巴形銅器が出土しました。朝日遺跡は県下の弥生時代を代表する遺跡であり、巴形銅器の他に、銅鐸や銅鏃などさまざまな青銅製品が見つかっています。(詳細は2・3ページ)

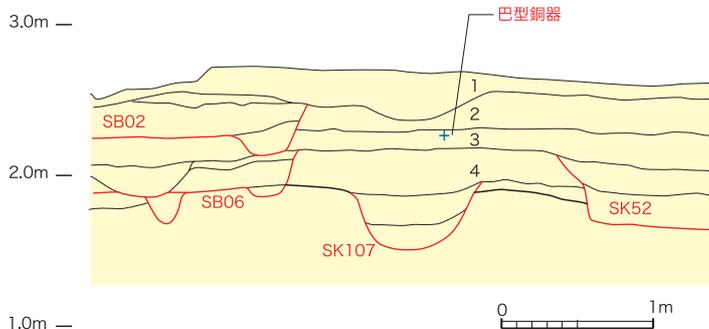
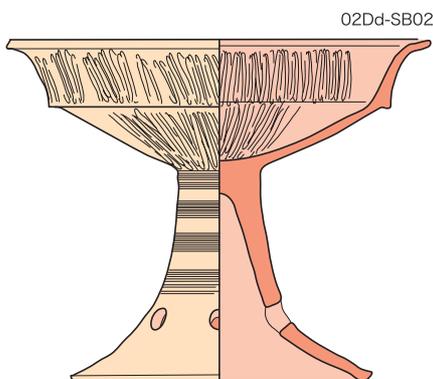
- 資料紹介 - 朝日遺跡出土の巴形銅器

出土状況と所属時期

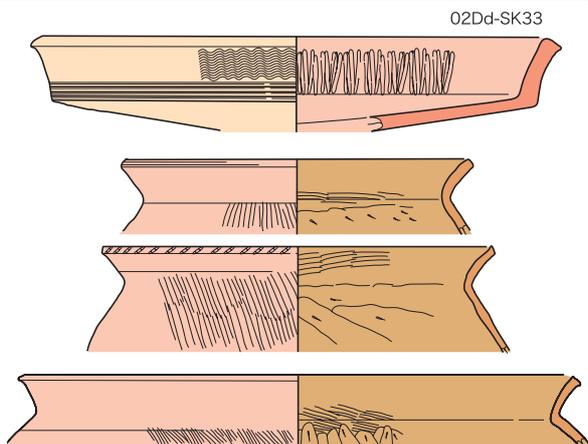
愛知県西春日井郡清洲町に所在する、朝日遺跡の発掘調査において巴形銅器が出土した。出土地点は、調査区 02Dd 区 竪穴住居 SB02 の南側に近接し、調査区を囲むシートパイルに設定したセクションベルト内(包含層)である。層位的には、第3層上位に位置し、第2層から掘削されている竪穴住居 SB02 との関係がまず問題となろう。SB02 からは山中 I 式 3 段階の高杯が床面上から出土している。また同一遺構検出面では、SB02 に重複する SK33 から、山中 I 式 2 段階の資料が確認できる。さらに第4層から掘削された SK52 は、弥生中期末葉の高蔵式期の土器を包含する。したがって層位的には山中 I 式期から高蔵式の間に位置づけることが可能である。遺構配置や層位を総合すると、巴形銅器の所属時期は、SK33 出土土器から導きだすことができる、山中 I 式 2 段階を中心とする時期を想定しておきたい。



巴形銅器出土調査区(左側隅がSB02)



巴形銅器出土地点断面図(1/4)

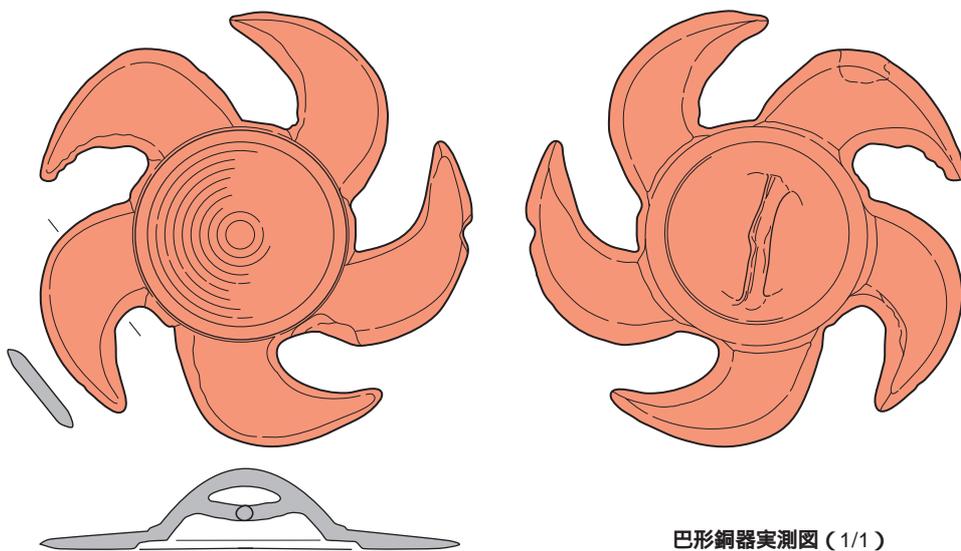


SB02・SK33 出土土器(1/4)

巴形銅器は表面を上にしてほぼ水平に置かれたような形状で出土した。また巴形銅器の内外面には赤色顔料が付着しており、分析の結果からは、ベンガラであることが判明している。出土地点での観察所見からは、周囲に赤色顔料が見られないことから、付着した顔料は、使用時におけるものであることが想定できよう。こうした使用時における赤色顔料の付着は、佐保ソウダイ遺跡や桜馬場遺跡などでも確認されている。弥生後期における巴形銅器の使用を考える上で重要な視点であり、巴形銅器は装着して使用することより、懸垂することを重視したものとも考えられる。

巴形銅器の特徴

5脚左振半球形座棒状鈕巴形銅器であり、巴径は5.6cmで座径は3.0cm、高さ1.1cmを測る。全体の形状が残り、保存状況も極めて良好な資料である。表面は全体に研磨痕跡が著しく光沢をおびる。半球形座の座縁部には段が見られる。内面は二次的な研磨痕跡がほとんど見られず、鑄出した状況をそのままとどめているものと思われる。座の中央部には棒状鈕が見られ、座内面と脚との間には4mmほどの一段の窪んだ平坦面が存在する。以上の形態的な特徴の中で、特筆できるものを整理すると以下のようにまとめることができる。座縁部の段の存在、均等に配置され幅広で短く鋭く振じる脚部。上下の鑄型に加工が施されたことによって生じた、脚端部両面に残る斜面と座内



巴形銅器実測図(1/1)

使用されたものに大きく区分されている。弥生後期に所属する巴形銅器は、北部九州地域を中心として分布し、形状はおおむね截頭円錐形座の大型品と、半球形座や扁平形座の小型品に区分でき、約30点強の出土が確認されている。朝日遺跡出土巴形銅器はその古相段階の良好な資料である。一方で、古墳前期の巴形銅器は、円錐形座で棒状鈕をもつ画一的な形状のものが主体をなし、多くは古墳の副葬品として約80点以上の資料が出土している。

面の窪んだ平坦部の存在。以上の諸点はいずれも弥生後期巴形銅器の古相を主張する要素として指摘されてきたものと考えられることができる。

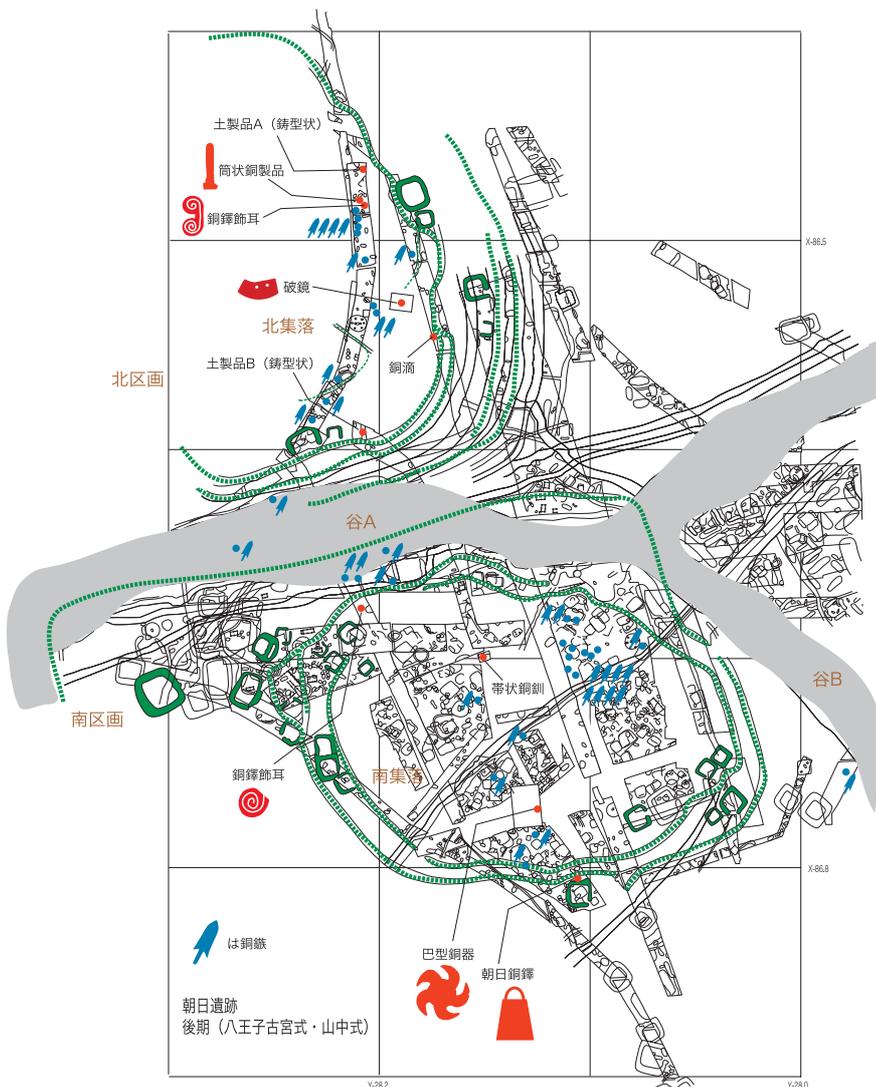
まとめにかえて

巴形銅器は弥生後期の西暦二世紀を中心に製作されたものと、古墳前期後半期を中心とした4世紀中頃から5世紀前葉に

両者はそれぞれ独立した系列と系譜をもつものと考えられてきた。現状では古墳前期巴形銅器が弥生後期巴形銅器の系列上に位置することは否定的な見解が支配的である。しかし朝日遺跡出土の巴形銅器は、脚数や棒状鈕などの特徴から、むしろ古墳前期の巴形銅器に繋がる要素を多くもつものとも考えられる。土器編年研究の進展を考慮すると、従来「弥生後期」とされてきた資料の中に、三世紀に所属する巴形銅器が複数存在することがわかる。巴形銅器の所属と系列に関して、再検討が必要である。

ところで朝日遺跡の弥生後期は、山中I式2段階に掘削された最後の環濠集落によって象徴される。こうした時期を中心に朝日銅鐸や筒状銅製品、さらには東海系銅鏃・破砕鏡・带状銅釧などの多様な青銅製品、あるいはその製作に係わる遺物が出土している。巴形銅器は、朝日遺跡での多様な青銅製品の製作とその環境が整っていたことを我々に教えてくれる大変重要な資料である。

(主査 赤塚次郎)



朝日遺跡弥生後期(青銅器出土地点と区画溝)

整理速報

かいゆうしっぽうもんはちりょう 鶯窯跡出土の灰釉七宝文八稜皿

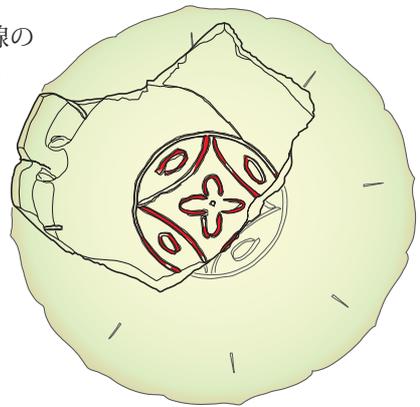
室町時代の瀬戸窯を代表する鶯窯跡の発掘調査からは、これまでも灰釉茶白一式、茶白形陶製品（下白）、灰釉馬文皿、人面陶板などのきわめて貴重な遺物が出土していますが、今回は灰釉七宝文八稜皿を紹介します。

灰釉七宝文八稜皿は器高 2.5cm、口径推定 15.6cm、底径推定 10.2cm を測り、厚く反り気味の底部は篋削り調整されています。灰釉は光沢のある黄緑系の緑色で、内底部の縁辺は釉が溜まり厚くなっています。器全体からみると約 1/4 の破片で、口縁部も一部しか残っていませんが、復元すると図のような八稜皿になります。八稜はつまんで輪花状に押し出しており、外側面には凹みが見られ、稜の尖った頂点の内側面には一条の短い沈線が下から上へ引き上げられています。

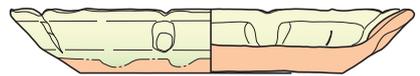


反り気味の底部は中央部分がやや厚く、1cmの厚さを計ります。内側底面には、一つの円に対して四方からそれぞれ円を組みあわせ、それぞれの1/4の円が重なり合わないようにした文様、七宝文が沈線によって描かれています。七宝文の文様の一部は欠損していますが、円の真ん中にはU字状の花弁、四方の区画の中には楕円が、いずれも篋により描かれています。

特筆すべきは、七宝文の沈線の部分に鉄釉（図中の赤い部分）でなぞっていることです。沈線部分すべてをなぞっているわけではありませんが、鉄釉が施されていることは確認できます。鉄釉はにじんだようなやや黒味を帯びた釉調となっています。



八稜皿の七宝文の文様は本例や幾何学的に変化した文様など各種ありますが、本例のように、鉄釉を施した例は稀で貴重な出土遺物といえます。
(主査 小澤一弘)



灰釉七宝文八稜皿実測図 (1/3)

「まいぶん愛知」は、次回が最終号となります。来年度からは内容を一新し、Web上での公開のみとなります。今よりもっと多くの情報を提示できればと考えています。(H)

まいぶん愛知 no.71

発行 平成 15 年 1 月 31 日
編集 (財)愛知県教育サービスセンター
愛知県埋蔵文化財センター
〒498-0017
愛知県海部郡弥富町前ヶ須新田字野方 802-24
TEL. 0567-67-4163 FAX. 0567-67-3054
http://www.maibun.com
Email:doki@maibun.com